

帝銀事件発生75年講演「帝銀事件第二十次再審請求
の進捗状況について」ごあいさつ
-帝銀事件と登戸研究所の概要について-

メタデータ	言語: ja 出版者: 明治大学平和教育登戸研究所資料館 公開日: 2023-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田,朗 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000182

イベントの記録

帝銀事件発生 75 年講演会「帝銀事件第二十次再審請求の進捗状況について」 ごあいさつ「帝銀事件と登戸研究所の概要について」

山田 朗

明治大学平和教育登戸研究所資料館長

帝銀事件から 75 年ということでこの企画を立てました。帝銀事件は 1948（昭和 23）年 1 月 26 日に起きた事件です。これは日本の犯罪史上においても稀にみる事件で、12 人もの人が毒殺される凄惨な事件だったわけです。この事件と登戸研究所がどういうふうに関係しているかという、実は非常に深く結びついています。大きくいうと 2 点あります。1 つは、今日のお話にもあるこの毒殺事件で使われた毒薬が果たして何であったのか。これはいまだに争点なんですね。毒殺事件で毒のことが分からないとは大変なことですね。この毒物を作ったのがひょっとして登戸研究所なのではないかという疑いが当時から言われていました。というのは登戸研究所員が捜査員に対してそのように発言しているんです。「これは登戸研究所で作った毒物に違いない」そういうような言い方をしている。実は登戸研究所で勤めていた人、あるいは関係者は警察に毒物についてアドバイスをする立場でありながら同時に怪しいと思われていたわけなんですね。ですから登戸研究所関係者は 731 部隊関係者に次いで多くの人数が警察にマークされて事情聴取を受けています。そういう関係で、毒物という点で登戸研究所とこの事件が密接に結びついているというのが第一点です。

もう一点は、この毒物について元所員が捜査過程で「(事件に使われた毒物は) 登戸研究所で開発した青酸ニトリールではないか」という発言をしているんです。そのあと、平沢さん逮捕後、やはり登戸研究所の元所員が新たに毒物の鑑定をしましてということで、警察の依頼に基づいて毒物鑑定書を作成しているのですが、その鑑定書は当初元所員が言っていたのとは全く異なる鑑定書なんですね。(犯行に使われた毒物は) 誰でも手に入る青酸カリだという鑑定書。通常鑑定書というのは残されていた毒物を鑑定して出すのが普通だと思うのですが、そもそも(帝銀事件に使われた) 毒物が(現場などに) 残されていないので、どのようにして薬を飲んだ人が亡くなったのかという状況から恐らく「これ」であろうと。青酸化合物であろうことは飲んだ人の解剖で分かっているわけです。しかし青酸化合物といってもいろいろあるわけで、それがいったい何であったのか。誰にでも手に入る毒物だったのか、そうではないのか。登戸研究所関係者が最初に言っていたことと、平沢さんが逮捕された後に言ったことは大きく

異なるんです。なぜそんなことが起きたのか。これは非常に難しいんです。帝銀事件が起きた1948年というのは731部隊関係者や登戸研究所関係者などが戦犯から免責された年なんです。免責工作が（帝銀事件捜査と）同時並行で行われていた、そういう微妙な時期に事件が起きているんです。そのため、単なる殺人事件…もちろん殺人事件は大変なことなのですが、殺人事件以外の意味合いも含まれる。それまで戦争犯罪が追及されていたという流れがあったにも関わらず、1948年からそれを封じ込めてしまう、なかったことにしてしまう、そういう流れがはっきりと表れてくる。戦後の大きな転換点にもなった事件、まさに捜査の過程でそういうことが行われたという点で、非常に注目すべき存在です。ということで、登戸研究所資料館でも、この事件と登戸研究所、それから毒物の関係が非常に密接に、戦犯免責の話とも密接に結びついているということで大きなテーマとして企画としてとりあげていこうということで、これまでもいくつか企画を組んできましたが、発生75年ということで今回改めてこの企画を立てました。それから第二十次再審請求という非常に大きな動きがまさに今現在進行形で動いておりまして、それについて多くの皆様にお伝えしたいという思いもありまして今回開催した次第です。

〔追記〕

本稿は、2023年3月4日（土）に対面・オンラインのハイブリッド方式で開催された帝銀事件発生75年講演会「帝銀事件第二十次再審請求の進捗状況について」の書き起こしに加筆・修正したものです。本文中の（ ）内は資料館による補足です。